『賢者ナータン』―偏見からの解放を求めて―

教授　友　田　孝　興
（ドイツ文学）

レッシング（1729-1781）は十八世紀ドイツ啓蒙主義期の偉大な劇作家にして、また何ものにも囚われない自由な哲学的・宗教的著作家でもあった。彼にとって「理性Vernunft」とは神が人間悟性に吹き込んだ「自然の光lumen naturale」である。したがって、その光によって無知と迷信の無明を照破し、より明るい知見と認識の智明へと自己の歩みを推し進め、束縛から自己を解放してゆくことが「啓蒙」（独Aufklärung、英enlightenment）の本義であった。レッシングが亡くなって二年後、カントはこの思潮を総括する形で、「啓蒙とは、自らその責めを負うべき未成年性から人間が脱却することである。……自己の悟性を使う勇気をもて！」と表明したが、レッシングはまさにこの意味において勇気ある啓蒙の士であった。

『賢者ナータン』（Nathan der Weise）

この作品の成立は、ルター派の正統主義を自認する主席牧師ゲッツェ（J.M.Goeze）との間でなされた激しい神学論争が、国家権力の介入によって終結を余儀なくされたことに起因するが、それに代わる自己の宗教的信念の表現として彼が選んだのが戯曲形式であった。彼は舞台を十二世紀のイエルサレムに移し、その地を十字軍から奪回したイスラムの史実の英雄サラディンと、キリスト教の若きテンプル騎士と、ナータンの養女レッヒャとを主人公の主たる対話者に選び、人間性の理想を求めて自己の宗教的啓蒙精神の教育的展開を図る。しかも主人公ナータンは「賢者」の「ユダヤ人」である。当時の社会通念からすれば、この作品は、既に題名からして挑戦的であるが、キリスト教社会の偏見的非寛容性と偽善的独善性を告発し、屈辱的抑圧に喘ぐ民族の名誉回復を図ることは、レッシングの宗教的啓蒙精神の当然の帰結であった。と同時に、同年配のモーゼス・メンデルスゾーン（Moses Mendelssohn）という高潔なユダヤ人哲学者との値遇と親交がその帰結に確信を与えるものであった。

ナータンの秘められた過去

ナータンの告白によると、彼は妻と七人の息子を、ユダヤ人なるがゆえにキリスト教徒によって焼き殺されている。三日三晩というもの、灰燼のなかで泣き崩れ、憤怒と狂乱のなかで神を非難し、キリスト教徒への執拗な憎悪を誓うのであった。そんな彼のところへ生まれて間もないキリスト教の洗礼を受けた女の子（レッヒャ）が連れてこられ、養育を依頼される。やがてナータンは理性を取り戻し、恩讐を超えて、「それでも神はまします」、「それが神のご意志であるなら」と嬰児を抱きしめ、「亡くした七人の子供のうち一人がもどってきた！」と神に感謝する。この憎悪の連鎖を断ち切り、しかも神の声を聞き取って、その神意を自己の実践行へと移すナータンの自己解放的・能動的寛容こそは、まさに自己対話による啓蒙理性の要請であった。

三つの指輪の比喩譚とサラディン

一方、イスラムのスルタン（支配者）であるサラディンは、キリスト教とユダヤ教とイスラム教のうち「真の宗教は一つしかあり得ない」、どれが「真の宗教」か、という意地悪い質問をナータンにする。ナータンは三つの指輪の比喩譚（ボッカチオの『デカメロン』に取材）をもってそれに応える。

遙か昔のこと、父子相伝の「不思議な力」をもつオパールの指輪があった。その力を「堅く信じて」身につけていると、神からも人からも愛され、好感を以て迎えられる、そんな「不思議な力」をその指輪は備えていた。代々その家の最愛の息子がそれを相続し家長となった。ある代になって、三人の息子を「偏見なき愛」を以て等しく愛していた父親は、誰にその指輪を譲るべきものかと困惑する。そこで彼は本物と寸分違わぬ指輪を二つ作らせ、それを三人の息子に分け与える。父親の死後、三人の間で真贋をめぐっての争いが起こり裁判に持ち込まれる。そこで賢明な裁判官は、どれが本物の指輪であるか証明できない以上、自分の指輪こそが本物であると「堅く信じて」、「柔和と、心からの親交と、善行と、神への深き帰依」を以て、本物の指輪に具わる「不思議な力」を発揮さすべく努め励むがよい。そして何千年も何万年も後に、その指輪の秘められた力が顕れてきたならば、自分よりももっと賢明な裁判官が判決を下すであろう、と諭すのであった。

ナータンはこの比喩譚を終えるや、その未来のもっと賢明な裁判官がサラディン自身ではないかと、彼に誘い水を向ける。しかし彼は厚顔無恥ではなかった。三つの指輪と同様に、三つの歴史的宗教においても、どれが「真の宗教」であるかは証明され得ない。自己の宗教が「真の宗教」であると言うなら、その主体的・宗教的真実性は、身を以て証明されなければ無意味である。この知見を彼はナータンの話を「聴く」ことによって獲得し、ユダヤ人に対する偏見から自己を解放する。そしてナータンに対して、いつまでも自分の「友達であってくれ」と語り掛けるのである。

テンプル騎士とレッヒャ

また、テンプル騎士は、イスラム軍に捕らえられイエルサレムに連れてこられたが、サラディンによって、その相貌が亡き弟アサッドとそっくりであるとの理由で命を救われ、自由の身となっている。ナータンの留守中に起こった火事の折、彼は火の中からその娘レッヒャを救出したが、ユダヤ人に対する偏見により、彼女からの感謝を拒絶している。しかしナータンの人格に触れ、自分が所属する民族や宗教以前に、共に人間であることの事実に目覚め、狂気じみた宗派の独善性から解放されてゆく。

レッヒャにおいても、最初は、神の奇跡により、自分の救出が本当の天使によってなされたと妄想していたが、彼女はナータンから、そのような「敬虔な夢想は善行を実践するよりは遙かに容易い」。信仰に値するものだけが奇跡なのではない。天使を煩わすまでもなく、生身の人間であるテンプル騎士が救出してくれたというその事実こそが真の奇跡なのだと教えられ、それを聞き入れることによって、敬虔な妄想から解放される。

啓蒙の教育劇・寛容のドラマ

このように、ナータンに出遇い、彼の話に「聞く」耳を持ち、その理性的・感性的人格に対話を通して触れる者はみな、囚われや偏見や非寛容から自己を解放し、またその啓蒙精神を他者に伝えてゆく役割を担っている。そして最後に、テンプル騎士とナータンの養女レッヒャが、サラディンの亡き弟アサッドの（彼はキリスト教に改宗し、ドイツ女性と結婚した）子供であるという事実が判明し、四人の主要人物がみな、民族と宗教の違いを超え、偏見と憎悪を克服し、一つの親族関係の中に統合されるのである。この作品が「人間性の理想」を求めての啓蒙の教育劇であり、寛容のドラマと称される所以がここにある。